

# 現代インドネシアにおけるイスラム教徒の イスラム教義理解と実践に関する意識調査（その1） —イスラム法の法制化について—

大 形 里 美

はじめに

## I. 調査概要

1. 調査地域とその選定理由
2. 調査対象者、及び調査方法

## II. 調査結果

1. 調査対象者のプロフィール
2. イスラム刑法についての見解
3. 政府によるスカーフの義務付けについて
4. 銀行の利子、飲酒、喫煙の禁止について
5. 政府による礼拝、断食の監視について
6. 飲酒、喫煙について

## III. 調査結果についての全体的考察

1. 地域差、近代派イスラムと伝統派イスラム  
の違い、性差
2. イスラム法の法制化へ向けた動きは、どの  
程度民意を反映したものか

おわりに

はじめに

本稿は、人口の約9割をイスラム教徒が占める現代インドネシア社会において、イスラム法の法制化がイスラム教徒によってどのように捉えられているのかを、意識調査の結果を手がかりに明らかにするものである。筆者は、同国のイスラム教徒のイスラム教義理解のあり方が同国の民主化やジェンダー主流化

とどのように関連しているのかを明らかにすることを目的として、2005年8月から2007年2月にかけてインドネシア国内6地域において意識調査を実施した。

一般にイスラム教義といえば、女性に対して抑圧的であるというイメージがあり、実際多くのイスラム諸国において、民主化やジェンダー主流化は遅れているとする見方がなされている。インドネシアのイスラム社会は、中東や南アジアの国々と比較した場合、男女隔離のあり方がかなり緩やかで、女性の社会活動や政治活動も盛んであるが、女性の義務や役割についての保守的なイスラム教義の影響を受けていないわけではない。同国において婚姻は宗教に基づくことが1974年婚姻法に明記され、婚姻・離婚・相続に関しては1991年に公刊された「イスラム法集成」によって法規定が定められている<sup>(1)</sup>。

そうした状況の中、1990年代半ば以降、保守的なイスラム教義を再検討する必要性を認識するリベラル派イスラム学者らによって、ジェンダー平等の視点から宗教テキストを再解釈する作業が進められてきている。2000年には、「ジェンダー主流化」が国策と位置づけられ、現在ジェンダー・バイアスが含まれる法律についての見直し作業が進められている<sup>(2)</sup>。

しかしジェンダー主流化政策が進められる一方、同国では1998年の政変以降、民主化プロセスの中で地方自治が開始され、ジェンダー主流化の流れとは逆行するとみられる動きも生まれている。地方自治が進む中、地方レベルでさまざまな条例が制定され、地域によってはイスラムを地方の独自性のシンボルとするところもあり、女性地方公務員や国立学校的女子生徒に対してスカーフの着用を義務付ける条例、売春を厳しく取り締まる条例<sup>(3)</sup>、女性の夜間外出を制限する条例など、「イスラム法的なニュアンスを含む条例」を制定するケースが少なくない。女性の服装の自由に対する規制や、女性の社会活動を制限する条例は、イスラム法の法制化の動きの一環として制定されてきているもので、近年の同国におけるイスラム法の法制化へ向けた動きは、実質的にジェンダー主流化に対抗する流れを形成していると、女性の権利を擁護するNGOなどは捉えている<sup>(4)</sup>。

こうした状況から、現在のインドネシアのイスラム社会は、ジェンダー主流化とイスラム法制化という二つの相反する二つのベクトルに牽引されている状況にあると捉えることが可能である。この二つのベクトルが、どの程度民意に沿ったものであるのかを検証することは、同国のイスラム社会の今後の方向性を予測する上で極めて重要なことであるという考えから、筆者はその点を検証するために意識調査を実施した。本稿はその調査結果の一部を報告するものである。

イスラム法制化の動きを受けて、イスラム法の施行をどの程度民衆が支持しているのかを検証するための調査は、2003年に日本のJICAの支援を受けて設立されたインドネシアの民間調査機関<sup>エル・エス・イー</sup>L S I (Lembaga Survei Indonesia：インドネシア調査機関) やジャカルタの国立イスラム大学<sup>ウー・イー・エヌ</sup>(UIN：Universitas Islam Negeri) などによって、これまでに実施されてきているものがあるが、全国33州から無作為にサンプルをとる方式のもので、地域による差異や、「近代派」イスラムと「伝統派」イスラム<sup>⑤</sup>の差異などは考慮せず、全体を押しなべて平均値を出す手法によるものである<sup>⑥</sup>。筆者が今回実施した意識調査は、民衆のイスラム教義の理解と実践のあり方、そしてジェンダー規範のあり様が、都市化の度合い、地域性、イスラムの宗派による違いといった要素とどのように関連しているのかに注目し、インドネシアのムスリム社会のあり様をより動態的に捉えることを意図している点が、上記の調査とは異なる。こうした手法をとったのは、近代化による生活スタイルの変化の度合いや、近代派イスラムと伝統派イスラムの違いによって、イスラム教義理解のあり方やジェンダー規範のあり方がかなり異なるであろうことが、これまでの聞き取り調査などから予測されたためである。

筆者が調査に用いた質問表は、個人のイスラム教義理解とその実践、及びジェンダー規範のあり方などについて幅広く質問する内容のものであったが、本稿では、特に1998年の政変以後、インドネシア各地で活発化しているイスラム法の法制化の動きが、どの程度民衆の意識に沿うものであるのかを検証するため

に、関連項目のみを抽出し、その分析結果を報告する。

## I. 調査概要

### 1. 調査地域とその選定理由

筆者は、2005年2月にジャカルタで実施した予備調査の結果を踏まえ、2005年8月から2007年2月にかけて、インドネシア国内6地域においてイスラム教徒を対象に対面式の意識調査を実施し、各調査地域から200ずつ、計1200のサンプルを収集した。本調査において調査対象とした6つの調査地域の内訳は、都市部と農村部を代表する地域としてそれぞれ1地域ずつ、伝統派イスラム組織<sup>エヌ・ウー</sup>NU (Nahdlatul Ulama=ナフダトゥール・ウラマーの略;「ウラマーの覚醒」の意/1926年設立)の支持基盤とされる地域を2地域、さらに近代派イスラム組織ムハマディヤー (Muhammadiyah;「預言者ムハンマドに従う者」の意/1912年設立)の支持基盤とされる地域を2地域とした。これは、都市部と農村部の比較、そして伝統派イスラムと近代派イスラムの比較を検証するためである。ちなみにNUの支持者は6千万、ムハマディヤーの支持者は3千万を上回るとされ、両組織は同国を代表する二大イスラム大衆団体である。

具体的には、都市部のイスラム教徒のサンプルを抽出するために首都ジャカルタを、農村部のイスラム教徒のサンプルを抽出するためにロンボック島を選んだ。そして、近代派イスラム組織が支配的な地域のイスラム教徒のサンプルを抽出するにあたっては、近代派イスラム組織ムハマディヤーの支持基盤といわれるジョクジャカルタ、及びスラウェシ島のマカッサル地域を選んだ。これは、両地域共にムハマディヤーが支配的な地域ではあるが、ムハマディヤー発祥の地であるジョクジャカルタのムハマディヤーは組織の中で「穏健派」とされ、一方のマカッサルは組織の中で「強硬派」と認識されており、両者の違いにも注目する必要があると考えたからである。また伝統派イスラム組織についても、組織内部の「穏健派」と「強硬派」の違いを考慮し、NU発祥の地で組織内



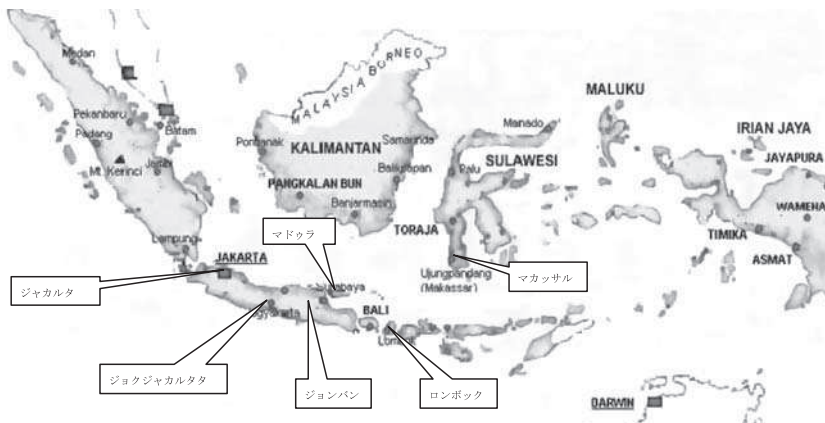
現代インドネシアにおけるイスラム教徒のイスラム教義理解と実践に関する意識調査（その1）（大形里美）

で「穏健派」とされる東ジャワ州ジョンバンと、組織内で「強硬派」とされるマドゥラ島を調査地として選んだ。【表1】は、6つの調査地域について、それぞれの調査時期と特徴を示したものである。

【表1】

	調査地域	調査時期	特徴
ジャカルタ	ジャカルタ首都特別州、南ジャカルタ郡、ポンドック・ピナン(Pondok Pinang) 村	2005 年 9 月 1 日 —9 月 30 日	都市（半分は新興住宅街、半分は旧市街）
ロンボック	西ヌサ・トゥンガラ州、東ロンボック県、アイムル (Aikmel) 郡、北アイムル村	2005 年 8 月 20 日 —8 月 31 日	農村 NW <sup>(7)</sup> が主流
ジョクジャカルタ	ジョクジャカルタ特別州、コタグデ(kotagede) 郡、プレングアン (Prenggan) 村	2005 年 8 月 20 日 —9 月 15 日	近代派イスラム組織ムハマディヤー地の「穏健派」支持基盤
ジョンバン	東ジャワ州、ジョンバン(Jombang) 県、ジョンバン市、ジョンバタン(Jombatang) 村	2006 年 12 月 3 日 —12 月 20 日	伝統派イスラム組織 NU 発祥の地 「穏健派」支持基盤
マドゥラ	東ジャワ州、バンカラ (Bangkalan) 県、バンカラ郡下の5つの村	2007 年 1 月 22 日 —1 月 28 日	伝統派イスラム組織 NU の「強硬派」支持基盤
マカッサル	南スラウェシ州、ゴア(Goa) 県、バジェン(Bajeng) 郡、リンブン(Limbung) 村	2007 年 2 月 10 日 —2 月 18 日	近代派イスラム組織ムハマディヤーの「強硬派」支持基盤

【地図】



以下は、これら6つの調査地域についての概要説明と、選定理由である。

#### <ジャカルタ>

都市部に居住するイスラム教徒のイスラム教義理解とその実践のあり方についての典型的なサンプルを抽出するために、首都ジャカルタを選定した。調査地ポンドック・ピナン村は、村の約半分がジャカルタの地元民であるブタウィ (Betawi) 族の古くからの居住地であり、残り半分が1975年以降に開発された新興住宅街であることから、ジャカルタに居住する多様なイスラム教徒のサンプルを抽出するのに適切であると判断した。旧市街と新興住宅街は壁によって仕切られており、交流はほとんどない。

#### <ロンボック島>

インドネシア国内の農村の中には、異教徒との接触が盛んな地域もあり、ヒンドゥー的要素の強い地域もあるが、本調査では、コスモポリタンの都市部と対照的なモデルとして、異教徒との接触がほとんどない農村地域を選定することにした。ロンボック島は、インドネシア国内においてイスラム色が強い地域として知られ、しばしば「狂信的 (fanatik)」であるといわれる土地柄であるが、西ヌサ・トゥンガラ州の州都マタラム市においては、すでに近代化と都市化による影響がかなりみられ、島の外部からの人口流入も相当程度あるため、同島東部に位置し、外部との接触がまだあまりない農村社会を調査地として選んだ。調査地として選んだ北アイムル村は、農業が基幹産業で、イスラム教徒が村の人口のほぼ100%を占めている。

#### <ジョクジャカルタ>

調査地に選んだコタグデ (Kotagede) の地名は、kota (町) と gede (大きい) という言葉からなり、「大きい町」という意味をもつ。ジョクジャカルタ特別州 (Daerah Istimewa Yogyakarta) の南部に位置するコタグデは、1640年までマ

タラム王国の都であった伝統的な下町で、マタラム王家の墓もある。銀細工が盛んな町としても有名なコタグデは、カウマン(Kauman)、カランカジェン(Karangkajen)とともに、近代派イスラム組織ムハマディヤーがいち早く発展した地域として知られ(これら3つの地域は、頭文字がすべてKであるため「3K地域」と呼ばれる)、ムハマディヤー支持者が住民のほとんどを占める。コタグデを調査地として選択した理由は、外部からの人口流入の激しいカウマン、カランカジェンに比べて、コタグデには地元出身者が多く、穏健派といわれるジョクジャカルタのムハマディヤー支持者の典型的なイスラム教義理解とその実践についてのサンプルを抽出することができると考えたからである。

#### <東ジャワ州ジョンバン県>

ジョンバンはサントリ(敬虔なイスラム教徒)を象徴する「イジョウ(緑:ijo)」の「ジョ」とアバンガン(純粋なイスラム教というよりもジャワ神秘主義的信仰をもつ人々)を象徴する「アバン(赤:abang)」の「バン」を組み合わせた名称だといわれ、伝統的イスラム教育機関であるプサントレン(イスラム寄宿塾)が多くあることから「サントリの町」とも呼ばれている。またジャワのプサントレンの創設者のほとんどがジョンバンのプサントレンで学んだことから、ジョンバンはプサントレンの中心とも言われている。数あるプサントレンの中でも、トゥブイルン(Tebuireng)、デンアニヤール(Denanyar)、タンバック・ブラス(Tambak Beras; バフルル・ウルムBahrul Ulumとも呼ばれる)、ダルル・ウルム(Darul Ulum; ルジョソRejosoとも呼ばれる)という、4つのプサントレンがとりわけ有名である。ジョンバンは伝統派イスラム組織NUの中心的な支持基盤であり、宗教生活に関して寛容であることで知られる。同地域を調査地として選択した理由は、穏健派のNU支持者たちのイスラム教義理解とその実践について典型的なサンプルを抽出することができると考えたからである。調査地に選んだジョンバタン村はジョンバン県の中心部に位置し、ジョンバン市の中心的モスクであるマスジッド・アグンとそれに隣接するカウ

マン地区を包摂し、同県の中心部を形成している。

#### ＜東ジャワ州バンカラン県＞

調査地に選んだ5つの村(Kemayoran村, Pangerangan村, Pejagan村, Demangan村, Kraton村)のあるバンカラン郡は、マドゥラ島の西部に位置する。マドゥラ島にはNUの創設者キヤイ・ハーシム・アーシュアリー(KH.Hasyim Asy'ari)とキヤイ・アブドゥル・ハスブッラー(KH.Abdul Wahib Chasbullah)の師であったキヤイ・ホルル(Kyai Cholil)のプサントレンがあり、NUを創設するかどうか迷っていたキヤイ・ハーシム・アーシュアリーにキヤイ・ホルルが設立を促したことでNUの創設が実現したと伝えられており<sup>⑧</sup>、マドゥラ島はNUにとって特別な意味をもつ地域だ。マドゥラ島はキヤイに対する尊敬の念が強い地域として知られ、現在でもキヤイ・ホルルの孫ホルル・ルラフマン(Kholirul Rahman)は、海の上を素足で歩くことができるとか、瞬時にカリマンタン島まで移動することができる信じられ、聖者として仰がれ畏怖されている。また同県では県知事を始めとして、政治家や地方議員にプサントレン関係者が多いという事実も、キヤイに対する敬意の高さを示していると考えられる。バンカラン郡の市街地の中心部には、キヤイ・ホルルの孫(ホルルル・ラフマンではない別の孫)が指導者として経営している二つの有名なプサントレン(Pondok Pesantren Nurul CholilとPondok Pesantren Syeichona Cholil)が存在する。東ジャワ州の海岸部およびマドゥラ島は「馬の足の裏地域(daerah tapak kuda)」と称され、強硬派の信者が多い地域として有名である。マドゥラ島バンカラン県を調査地として選択した理由は、そうしたNUの強硬派の信者たちのイスラム教義理解とその実践のあり方についての典型的なサンプルを抽出できると考えたからである。

#### ＜南スラウェシ州ゴア県バジェン(Bajeng)郡リンブン(limbung)村＞

南スラウェシ州は、1950年代から60年代にかけてイスラム国家樹立運動が繰

現代インドネシアにおけるイスラム教徒のイスラム教義理解と実践に関する意識調査（その1）（大形里美）

り広げられた地域の一つとして知られている。イスラム国家樹立運動は国軍によって鎮圧されたが、今でも、イスラム国家樹立運動の当地での指導者であったカーハル・ムザッカルを尊敬するものは少なくない。

調査地として選んだ南スラウェシ州ゴア県は、マカッサル市に隣接する県で、ムハマディヤー組織がもっとも発展している地域の一つとして知られ、とりわけバジェン郡リンブン村は、地元でもムハマディヤー組織が草の根まで浸透している地域とされている地域だ<sup>9)</sup>。ジャワ島ジョクジャカルタのムハマディヤー組織の信者たちが穏健派であるといわれるのに対して、南スラウェシ州のムハマディヤー組織の信者たちは強硬派といわれる。南スラウェシ州ゴア県を調査地に選択した理由は、そうした強硬派のムハマディヤー信者たちのイスラム教義理解と信仰実践について典型的なサンプルを抽出するためである。

## 2. 調査対象者、及び調査方法

調査対象者は、2004年総選挙の有権者名簿を用いて、各調査地域から200名ずつ無作為に抽出し、6地域で合計1200人とした<sup>10)</sup>。アンケート調査は、各調査対象者の自宅を一軒ずつ訪れ、対面式で実施した。1200人に対する調査の実施にあたっては、ジャカルタではインドネシア大学関係者（社会学教員、大学院生）から、ジョクジャカルタではムハマディヤー大学関係者（社会学教員、大学院生、NGO関係者）から、その他の地域では政府の統計局（BPS）の職員から調査協力を得た。有権者名簿から無作為に抽出された調査対象者を訪問した際、その住民が非イスラム教徒であった場合、あるいは死亡や転居などによってすでに有権者名簿に記載された住所に居住していない場合には、有権者名簿の次の欄に記載されている住民を調査対象者とすることをルールとした。

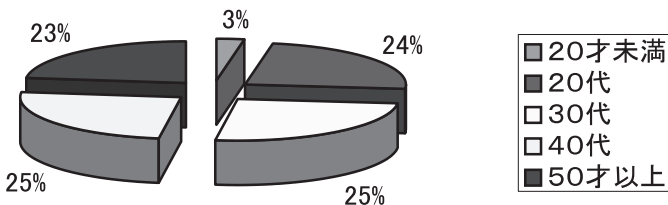
## II. 調査結果

### 1. 調査対象者のプロフィール

#### (1)年齢構成

調査対象者1200名の年齢構成をみると、20代から50才以上まで、ほぼ同じ割合でサンプルが得られていることがわかる。(【グラフ1】参照。)

【グラフ1】調査対象者の年齢構成



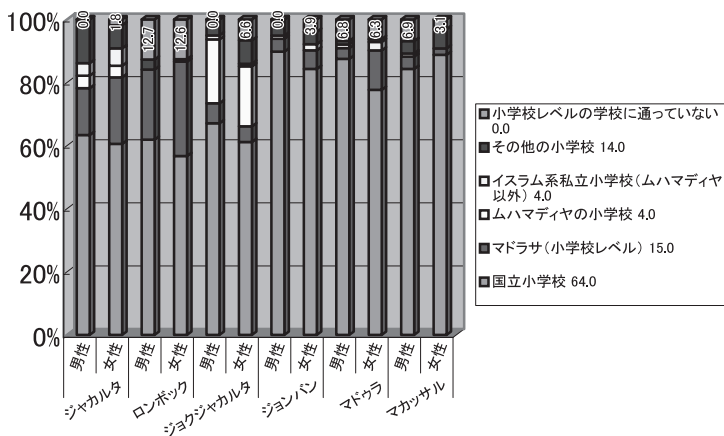
20才未満の調査対象者が極端に少なくなっているのは、すべての調査地域で2004年の有権者名簿を用いたため、調査時期のずれによって、2004年当時18才であった住民が、まだ19才であった地域と、全員がすでに20才を超えてしまった地域とができてしまったことが理由である。有権者名簿には18才以上の住民が登録されていたため、2005年8月に調査を実施したジャカルタ、ジョクジャカルタ、ロンボックについては、20才未満の調査対象者が若干含まれたが、2006年12月から2008年2月にかけて調査を実施した他の地域については、名簿に掲載されていた住民全員がすでに20才に到達していたため、20才未満の調査対象者が存在しなかった。

#### (2)調査対象者の教育レベル

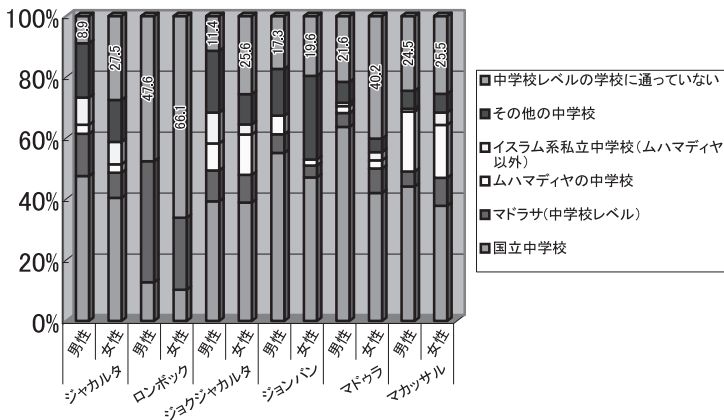
調査対象者全体の教育レベルについてみると、小学校レベルの教育を受けていない者は全体の5.1%、中学校レベルの教育を受けていない者は28.7%、高校レベルの教育を受けていない者は43.0%、高等教育を受けていない者は71.3%となっていた。これを調査地域別にみると、ロンボックの調査地が、今回の

6つの調査地域の中で、最も教育レベルが低かった。ちなみにロンボックの調査地では、小学校レベルの学校に通っていないものが、男性の12.7、女性の12.6%、中学校レベルの学校に通っていないものは、男性の47.6%、女性の66.1%であった。（【グラフ2】【グラフ3】を参照。）

【グラフ2】小学校レベルの教育機関

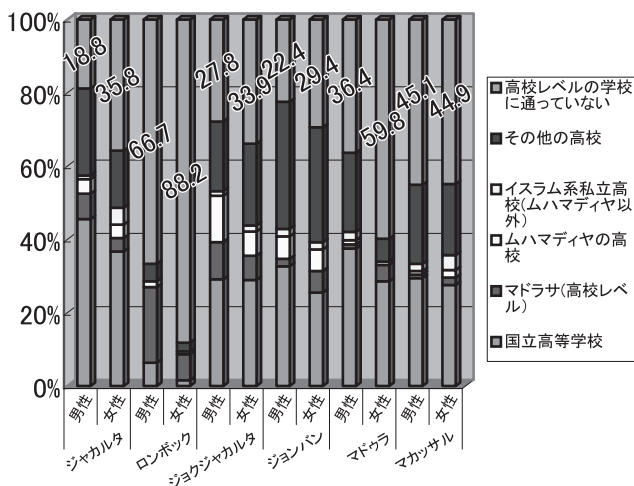


【グラフ3】中学校レベルの教育機関



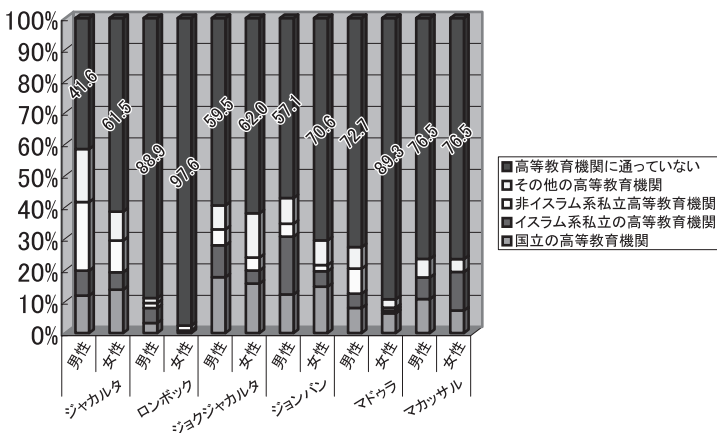
高校レベルの教育については、首都ジャカルタが当然ながら最も教育レベルが高く、典型的な農村のサンプルとして選んだロンボックがもっとも教育レベルが低い。その他の調査地域についてみると、マドゥラ、マカッサルに比べ、より都市化の進んだジョンバン、ジョクジャカルタにおいて、より教育レベルが高い。ここで興味深い点は、男女間の教育レベルに注目した場合、近代派イスラム組織ムハマディヤが支配的な地域であるジョクジャカルタとマカッサルにおいては、伝統派イスラム組織NUが支配的な地域であるジョンバン、マドゥラ、そして都市型モデルとして選択したジャカルタ、及び農村型モデルとして選択したロンボックと比較しても、男女間に比較的平等な教育機会が開かれているとみられる結果が得られたことである。高等教育レベルの教育となると、さらに教育を受けていない者の比率が高まるが、地域間の格差、地域ごとの傾向は高校レベルのそれと同様である（【グラフ4】、【グラフ5】を参照）。

【グラフ4】高校レベルの教育機関





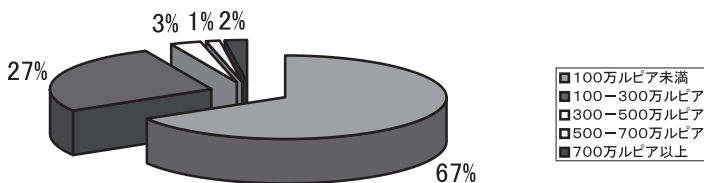
【グラフ 5】高等教育



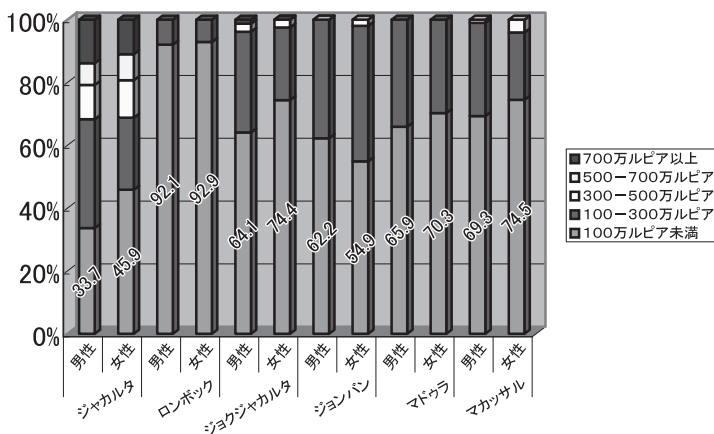
### (3)経済的状況

経済的状況を、世帯の一ヶ月の支出額で分類すると、以下のような結果となった。100万ルピア未満（調査時の換算レートは1円＝74～75ルピアであった。1円＝75ルピアのレートで計算すると、100万ルピア＝13333円である。）の世帯が67%、100万～300万ルピアが27%、300万以上の世帯は全体の10%に満たない（【グラフ 6】を参照）。これを地域別に見てみると、ジャカルタが一ヶ月の支出額が最も高いことがわかる。逆にもっとも一ヶ月の支出額が低いのがロンボックである。ジャカルタの次にジョンバンの支出額が高く、続いてマドゥラ、そしてジョクジャカルタとマカッサルはほぼ同じくらいの状況であることがわかる（【グラフ 7】を参照）。都市と農村では物価や平均賃金にも差があること、また農村部では食料自給率が高いことなどを考慮すれば、一ヶ月の支出額がそのまま生活水準を反映する値とはいえないが、一ヶ月の支出額の地域差が教育水準の地域差に相関している点は指摘できる。

【グラフ6】調査対象者の一ヶ月の支出額



【グラフ7】一ヶ月の支出額 (地域ごと)

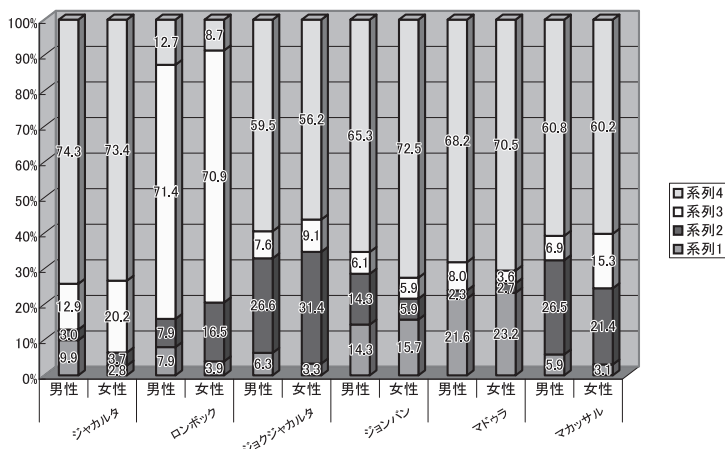


#### (4)所属するイスラム組織

調査において、近代派イスラム組織ムハマディヤーが支配的な地域として選択したジョクジャカルタとマカッサルは、予測通りムハマディヤーに所属する者の比率が他の調査地域に比べ高いという結果が出た。また同様に、伝統派イスラム組織NUが支配的な地域として選択したジョンバンとマドゥラについても、予測通りNUに所属する者の比率が他の調査地域に比べ高いという結果が出た（【グラフ8】を参照）。ロンボック島において所属するイスラム組織を「その他」とする回答が多数を占めているが、これはNW（<sup>エヌウェー</sup>Nahdhatul Wathon＝ナフダトゥール・ワトンの略）と呼ばれるロンボック島を基盤とするイスラム組織に所属する者が圧倒的に多いからである。ジャカルタは、無所属の比率

が74.3%と最も高く、ムハマディヤー、NUに所属する者の比率が低い点が特徴となっている。ジョンバン、マドウラについては、NUに所属するものが多いものの無所属と回答した者の比率が7割近くを占め、ジョクジャカルタ、マカッサルよりも無所属の割合が高いことがわかる。また若干の男女差も見受けられる。

【グラフ8】所属しているイスラム組織



## 2. イスラム刑法についての見解

イスラム刑法にはさまざまな刑があるが、今回の調査では、窃盗者に対する切手刑と姦通者に対する石打刑について、その賛否を質問した。切手刑とは、窃盗を犯すたびに、右手、左足、左手、左足の順に切断していくというものであるが、その執行には条件があり、イスラム法学によれば、飢え死にしそうになっていたときに食べ物を盗んだ場合などには、切手刑は適応されないとされる。また石打刑は、既婚者が姦通を犯した際に科されるとイスラム刑法によって定められている刑で、首から上だけが地上に出よう身体を地中に埋めた状態で、死ぬまで顔や頭に石を投げつけるというものである。ちなみに未婚者が姦通した場合には、石打刑ではなく、鞭打ち刑100回が科されると定められてい

る<sup>41)</sup>。

インドネシアにおいては、切手刑や石打刑はイスラム国家樹立運動の時代に一部の地域で行われていたという話も聞く<sup>42)</sup>が、現在はオランダ植民地時代から引き継がれたオランダの刑法が基礎となっており、こうしたイスラム刑法は適用されていない。現在インドネシアにおいては、2005年6月からナングロ・アチェ・ダルッサラーム特別自治州(アチェ特別自治州)で、姦通、賭博、飲酒を行なった者に対して直径0.75～1センチ、長さ1メートルのロタン(藤)製の鞭を使って6～8回の鞭打ち刑が、適用されている<sup>43)</sup>。アチェ特別自治州におけるイスラム刑法の実施は住民がかねてより望んでいたことだとされるが、飲酒で鞭打ちの刑は重過ぎるのではないかと、汚職で巨万の富を得ている者がこうした刑罰の対象になっていないことへの不満の声も少なくない。

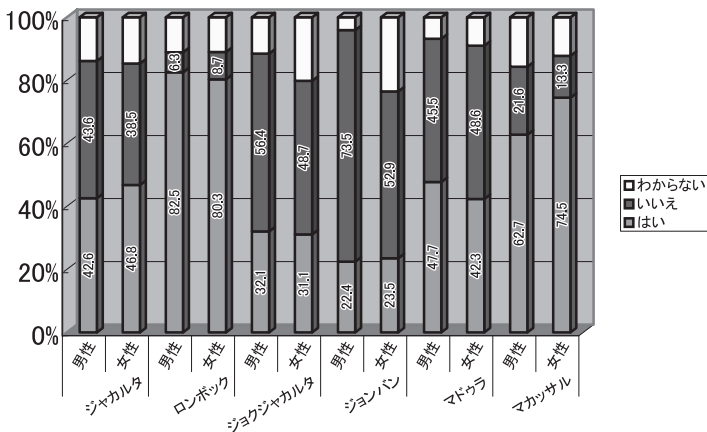
アチェ以外の地域は自治権を持たないため、そうしたイスラム刑法の実施は許されていないが、イスラム組織の指導者らの中には、治安の悪化を取り締まるためにもこうしたイスラム刑法を取り入れるべきだと主張する者が少なくない。急進派の団体はもとより、穏健派イスラム団体として知られるムハマディヤーにおいても、内部にそうした考えを持つものは少なくない。実際、ムハマディヤー大学の学生の参考書としてムハマディヤー大学関係者によって出版された『イスラム法学 (Fikih Islam)』では、鞭打ち刑、石打刑、切手刑などが教えられている。同参考書には、未婚者が姦通した場合には100回の鞭打ち刑、既婚者が姦通した場合には石打刑に処せられるべきだとイスラム法が教えていると明記されている。しかしレイプによる姦通の場合、被害者の女性は石打刑の対象にならないとされている。また窃盗については、飢え死にしそうになった者が果物を盗んだ際に、預言者が処罰しなかった逸話などを紹介した上で、窃盗罪に切手刑が適用される場合の条件として、a) 盗まれたものが十分価値のあるものであること、b) 盗まれたものが金9.5gほどの価値になること、c) 盗まれたものが十分安全な場所に保管されていることが挙げられている<sup>44)</sup>。

今回、石打刑に関する質問項目では、「姦通した女性が石打にされることに賛

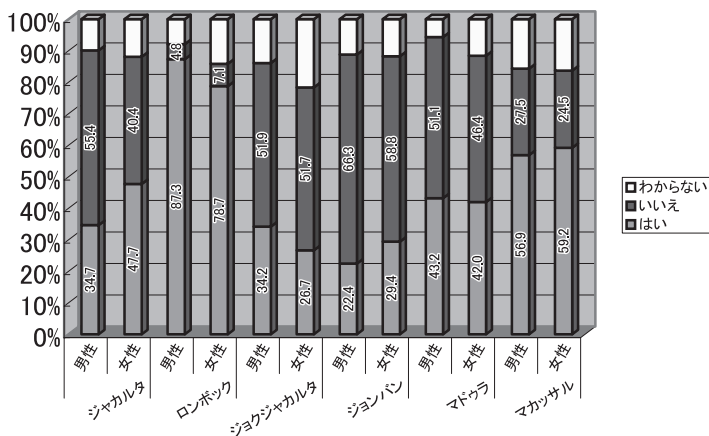
成か」とした。本来、石打刑は男性も対象となるが、妊娠によって姦通が証明されてしまう女性とは異なり、男性の場合は証明が困難であるためであるため、現在、切手刑や石打刑などのイスラム刑法が適用されているサウジアラビアなどでは、石打刑の執行対象者は、実質的に女性のみで、レイプされた被害者女性も石打刑に処せられているのが現状だ。そうした点を考慮し、より実態に即した内容の質問にした。

切手刑、石打刑に賛成かどうかを問うアンケート調査の結果を見ると、男女差よりも地域差が大きい。二つの刑について賛成かとする質問に対して「はい」とする賛成者の比率が最も高いのがロンボックで、続いてマカッサル、マドゥラの順に賛成する比率が高い（【グラフ9】、【グラフ10】参照）。逆に二つの刑について賛成かとする質問に「いいえ」と回答した者の割合は、ジョンバンが一番高く、続いて、ジョクジャカルタ、ジャカルタと続く。

【グラフ9】泥棒が手を切られることに賛成か



【グラフ10】姦通した女性が石打されることに賛成か

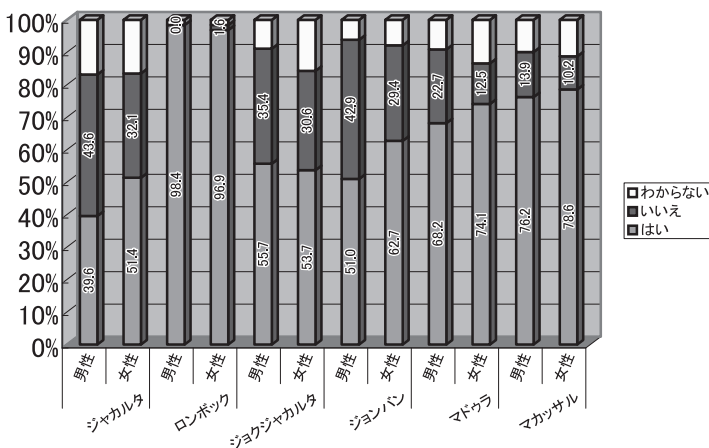


### 3. 政府によるスカーフの義務付けについて

#### (1) 政府がスカーフを義務付けることについて

インドネシアでは、2000年以降、地方分権化の流れの中で、国立の小学校、中学校、高校においても、校長の権限によって、毎日もしくは、決まった曜日

【グラフ11】政府がスカーフを義務付けることに賛成か



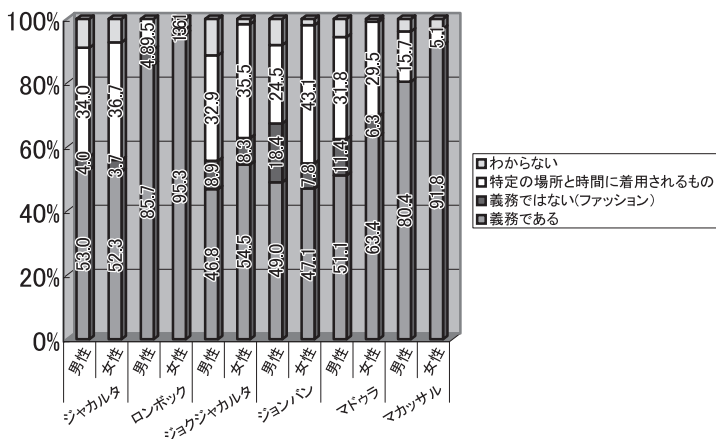
にイスラム服を着用することを義務づけるところが増加する傾向にある。中には女性地方公務員にスカーフの着用を義務づける地方政府もある。

「政府がスカーフ着用を義務づけることに賛成か」とする質問に対しては、ロンボックでは男性の98.4%、女性の96.9%、マカッサルでは男性の76.2%、女性の78.6%、マドウラでは男性の68.2%、女性の74.1%が「はい」と答えている。もっとも賛成の比率が低かったのはジャカルタで、「はい」とする回答は、男性の39.6%、女性の51.4%であった（【グラフ11】参照）。

## （2）スカーフについての見解

スカーフの着用について「義務である」とする回答は、ジョンバンやジョクジャカルタなど最も少なかった地域においてもほぼ半数を占め、ロンボック、マカッサルについては、男性の8割以上、女性の9割以上が「義務である」と回答している。「特定の場所と時間に着用されるもの」とする回答が最も多かったのは、男性についてはジャカルタで、ジョクジャカルタ、マドウラについてもそれぞれ3割を上回っている。女性については、ジョンバンの女性が最も多く43.1%が「特定の場所と時間に着用されるもの」としている。つづいてジャカル

【グラフ12】スカーフについての見解は



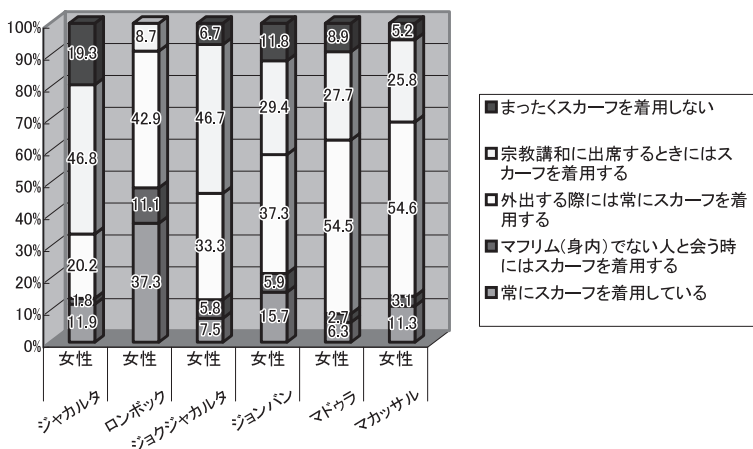
タの女性が36.7%、ジョクジャカルタの女性が35.5%となっている（【グラフ12】を参照）。

### (3)女性たちの普段の服装

実際に日常生活の中で、女性たちがスカーフを着用している比率は、スカーフ着用を義務とする比率とは微妙に異なっている。「常にスカーフを着用している」「マフラムでない人と会う時にはスカーフを着用する」「外出する際には常にスカーフを着用する」とする回答を合計した値をスカーフの着用を義務とする比率と比較してみると、ジャカルタでは、スカーフの着用を義務であるとする回答が52.3%であったのに対して、実際に着用しているとする回答は33.9%で、義務と考えていながら、実際にはスカーフを着用する者の割合が低いことがわかる。他の地域についてみてみると、ロンボックでは義務とする回答が95.3%であったのに対して、実際に着用しているのは91.3%で、あまり大きな開きはない。ジョクジャカルタでは義務と回答したのが54.5%であったのに対して、実際に着用しているのは46.7%で、若干少ない。ジョンバンでは義務とする回答が47.1%であったのに対して、実際に着用しているのは58.8%で、義務ではないと考えているが着用しているものが12%弱いることがわかる。マドウラでは義務とする回答が63.4%であったのに対して、実際に着用しているのは63.4%で、値が一致している。マカッサルは義務とする回答が91.8%であったのに対して、実際に着用する者が69.1%で、義務と考えながらも着用していないものが相当数いることが伺える。ジャカルタとジョクジャカルタでは「宗教講和に出席するときにはスカーフを着用する」とする回答が、それぞれ46.8%と46.7%で最も多かった。「全くスカーフを着用しない」とする回答は、ジャカルタの女性が19.3%で最も高く、続いてジョンバンの女性が11.8%、マドウラ8.9%、ジョクジャカルタ6.7%、マカッサル5.2%となっている（【グラフ13】を参照）。

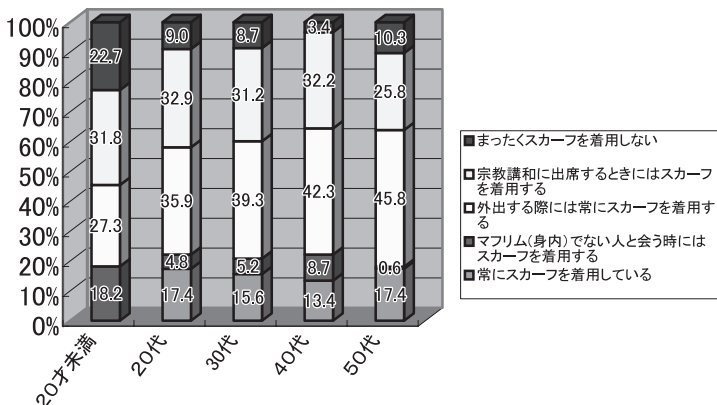


【グラフ13】女性の普段の服装（地域別）



女性の普段の服装について年齢による違いをみてみると、若い方がスカーフの着用率が低いことがわかる。しかしながら、これが時代による変化が影響していることによる結果なのか、あるいは一人の女性が年齢が高くなるほどスカーフの着用率が上がることによる結果なのか、定かではない（【グラフ14】を参照）。

【グラフ14】女性の普段の服装（年代別）

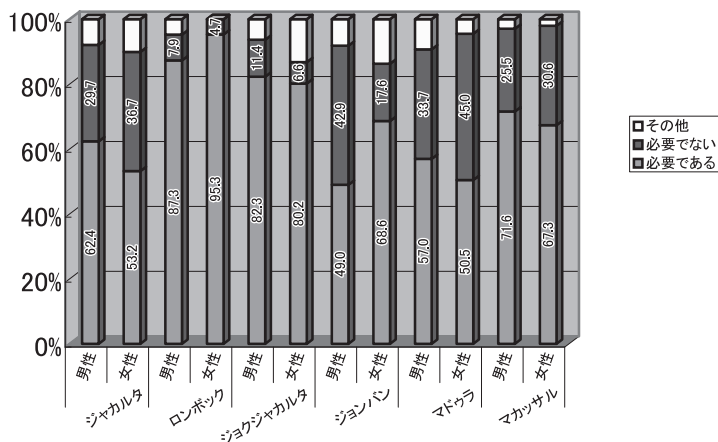


## (4)幼稚園の女の子がスカーフを着用することは必要か

近年、イスラム系私立学校への人気の高まりを背景に、幼稚園からスカーフを着用させる光景が珍しくなくなってきた。1才にもならない小さな女児にスカーフ(メリヤス生地で作られ、顔の部分に穴が開けられていて頭からすっぽり被せるタイプ)を着用させている光景も珍しくなくなっている。20年程前には、成人女性が職場でスカーフを着用することさえ肩身が狭いと感じるといわれる時代だったことを考えると、ここ20年ほどの間のスカーフに対する社会認識の変化はかなり大きい。

幼稚園の女の子がスカーフを着用することは必要か、とする質問に対し、ジョンバンの男性を除き、すべての調査地域の男女の半数以上が「必要である」と回答した。「必要である」とする回答の比率がもっとも高かったのはロンボックで、女性の95.3%、男性の87.3%が「必要である」と回答している。次に「必要である」とする回答が多かったのはジョクジャカルタで、男性の82.3%、女性の80.2%が「必要である」と回答した。その他「必要である」と回答した率が高かったのは、男性については、マカッサルの男性が71.6%、女性についてはジョンバンの女性が68.3%、そしてマカッサルの女性が67.3%という結果となった。

【グラフ15】幼稚園の女の子がスカーフを着用することは必要か



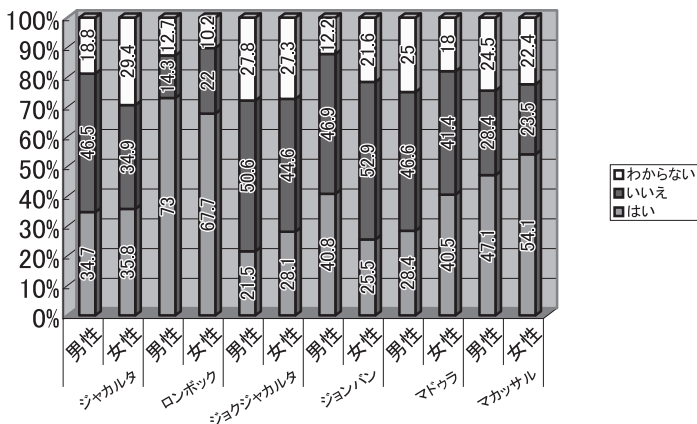
「必要でない」とする回答が最も多かったのは、マドウラの女性で45.0%、続いてジョンバンの男性が42.9%、ジャカルタの女性が36.7%などとなっている。ジョンバンでは男女の意識差が大きい (【グラフ15】を参照)。

#### 4. 銀行の利子、飲酒、喫煙の禁止について

##### (1)銀行の利子を禁止することについて

イスラム法において、リバー (riba; 高利) はハラームとされており、著名なエジプトのイスラム学者、ユスフ・アル・カルダウィ博士 (Dr.Yusuf Al Qaradhawi) を始め、イスラム世界のイスラム学者らは銀行金利をハラームとする立場から国際的なシンポジウムなどでもそうした立場を明らかにしてきた。インドネシアのイスラム学者らの間でも、銀行の利子に関しては「非常時 (darurat) においては許される」とするか、「より絶対的な理解において、ハラームとする」かで意見が分かれていた。ムハマディヤーでは、かつて1968年に同組織のジャカルタ支部が銀行を設立する計画を本部に提出した際にタルジ協議会 (Majlis Tarjih : 法学審議協議会) において銀行金利について審議されたことがあった。審議の結果、最も小さい金利であってもリバーと無縁ではないことが確認され、イスラムの原則に従った経済システムの実現するよう提言されるとともに、国立銀行については、公共性が保障されるという理由から、「まだ明らかでない事柄 (musytabihat) 」であるとされ容認された<sup>(5)</sup>。1963年以降中東諸国を中心に整備されてきたイスラム銀行制度にならって、インドネシアにおいても1992年以降イスラム銀行 (Bank MuamalahやBank Syariahと呼ばれる) が多く設立され、ハラールでない製品を生産する企業には融資しない原則とともに、「プライシング (pricing) 」とか「収益の分配 (bagi hasil) 」と呼ばれるものを金利の代わりに支払うことを特徴としている。インドネシア・ウラマー協議会 (MUI) は、2003年12月、銀行の金利がイスラム法でハラームとされているリバー (高利) にあたるとするファトワーを出し、銀行金利の問題は、インドネシアの銀行業界に波紋を投げかけている。

【グラフ16】 政府が銀行の利子を禁止することに賛成か？



「政府が銀行の金利を禁止することに賛成か」とするアンケート調査では、ロンボックとマカッサルでは、男女ともに「はい」とする回答が「いいえ」とする回答を上回ったが、ジョクジャカルタ、ジョンバン、ジャカルタでは、男女ともに「いいえ」とする回答が「はい」とする回答を上回った。(【グラフ16】を参照)

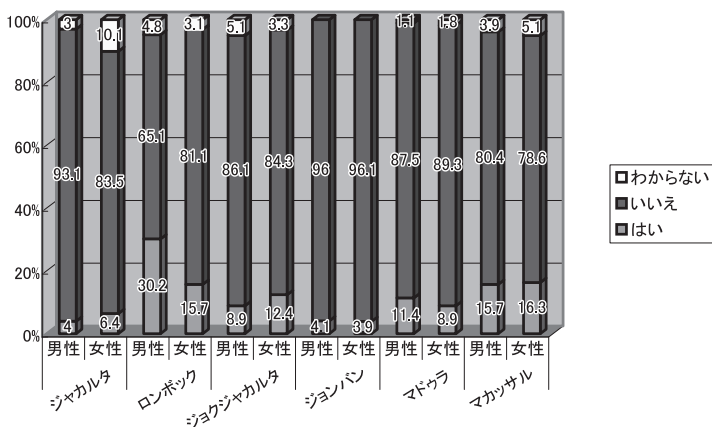
## 5. 政府による礼拝、断食の監視について

### (1)警察が礼拝を監視することについて

「警察が礼拝を監視することについて賛成か」を問う質問に対しては、「いいえ」とする回答がすべての地域で圧倒的多数を占めた。イスラム刑法やスカーフの義務づけなどに賛成する比率が高かったロンボックにおいてさえ、賛成したのは男性の30.2%、女性の15.7%に過ぎない(【グラフ17】を参照)。

一日5回の礼拝をどの程度行っているのかを質問したところ、ロンボックは男女とも100%が「一日5回」行っていると答え、その他の地域に関しても「一日5回」行っているとする回答が多数を占めているが、「はい、しかし一日5回ではない」という回答も多い。ロンボック以外の地域を比較してみると、マドゥ

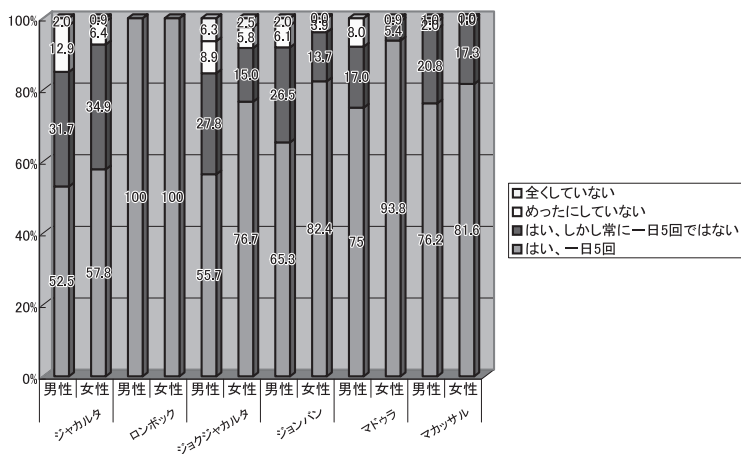
【グラフ17】警察が礼拝を監視することに賛成か



ラはマカッサルは、ジョンバンとジョクジャカルタよりも「一日5回ではない」とする回答が、男女ともにより少ない点が注目される。ちなみにジャカルタは「一日5回ではない」とする回答が最も多い。他の要素が影響していることも当然考えられ、一概に都市化の影響とは言えないものの、都市化が進むと礼拝を教義に忠実に一日5回行う習慣を続けることが困難になるということが背景にあるのかもしれない。「めったにしていない」とする回答は、多い順に、ジャカルタの男性の12.9%、ジョクジャカルタの男性の8.9%、マドゥラの男性の8.0%、ジャカルタの女性の6.4%、ジョクジャカルタの女性の5.8%となっている。また「全くしていない」とする回答は、ジョクジャカルタの男性の6.3%、ジョクジャカルタの女性の2.5%、ジャカルタの男性の2.0%、マカッサルの男性の1.0%となっている。

礼拝を「一日5回」行っているとする回答は、どの調査地域に関しても男性よりも女性の方が多く、「めったにしていない」とする回答は、女性よりも男性の方が多い結果となった（【グラフ18】を参照）。

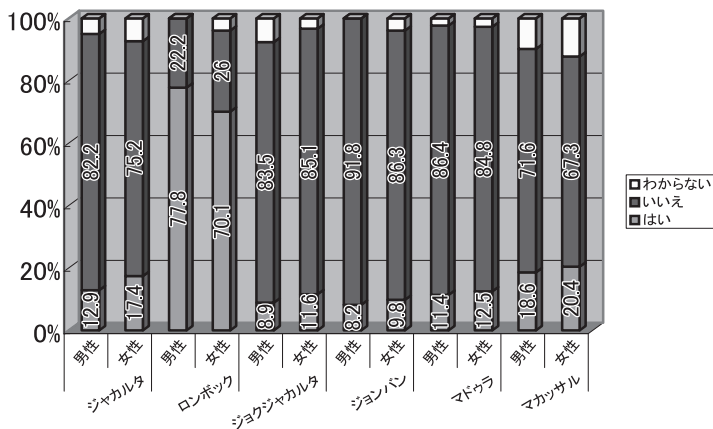
【グラフ18】一日五回の礼拝をしているか



(2)警察が断食しないものを逮捕することについて

「警察が断食をしないものを逮捕することに賛成か」とする問いに対しては、ロンボックでは「はい」とする回答が、男性の77.8%、女性の70.1%で、賛成意見が多かったものの、他の5つの地域については、ほぼ8割以上が「いいえ」と回答している（【グラフ19】を参照）。

【グラフ19】警察が断食しないものを逮捕することに賛成か

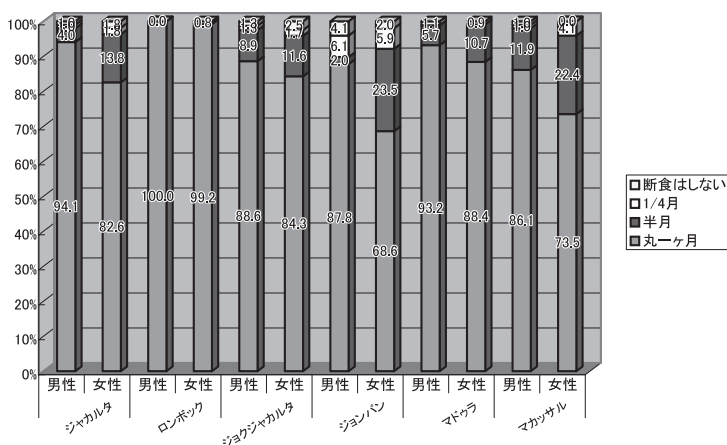


ラマダン月の断食をどの程度行っているのかを質問したところ、ロンボックは男女とも「丸一ヶ月」とする回答がほぼ100%を占めたが、その他の地域に関しては、「半月」とする回答もかなり見られる。「半月」と回答したのは多い順に、ジョンバンの女性23.5%、マカッサルの女性の22.4%、ジャカルタの女性の13.8%、マカッサルの男性11.9%などとなっている。「1／4月」とする回答は多い順に、ジョンバンの男性の6.1%、ジョンバンの女性の5.9%、マカッサルの女性の4.1%などとなっている。「断食はしない」とする回答はわずかではあるが、ジョンバンの男性の4.1%、ジョクジャカルタの女性の2.5%、ジャカルタの女性1.8%、ジョンバンの女性の2.0%が「断食はしない」と回答している。

断食に関しては、男性の方が教義に忠実に丸一ヶ月の断食を行っている割合が高いようである（【グラフ20】を参照）。

\* 女性については、「丸一ヶ月（断食をできない生理期間中は除く）」を選択肢として回答してもらった。

【グラフ20】ラマダン月の断食をどれくらいしているか



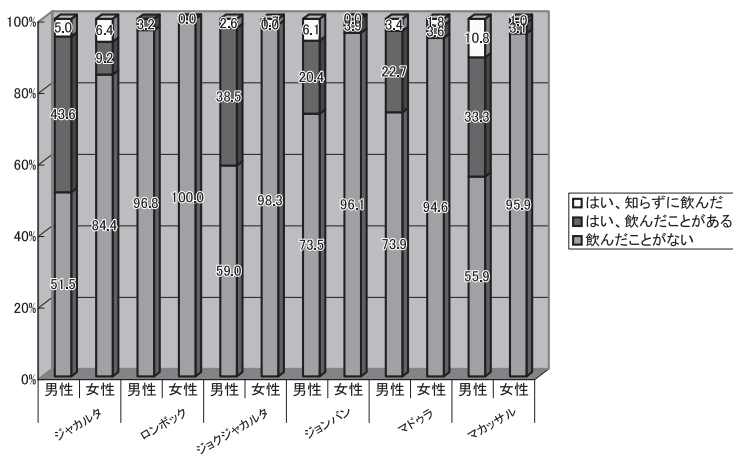
## 6. 飲酒、喫煙について

### (1) 飲酒の禁止について

飲酒はイスラムではハラームとされ、インドネシアでも条例で販売を禁止する地方政府が増加しつつある。一般にジャカルタなど大都市では、ビールなど低アルコール飲料（アルコール度数5%以下）は、一般のスーパーなどで販売されているが、ワインやウイスキーなどアルコール度数の高いものは、売り場の倉庫に保管され、人目につかないように販売されていることが多い。バリ島など外国人が多く集まる観光地は例外として、地方都市ではビールもあまり見かけない。

アルコールを飲んだことがあるかどうかを質問した結果、「飲んだことがある」とする回答は、ジャカルタの男性が43.6%、ジョクジャカルタの男性が38.5%、マカッサルの男性が33.3%と多く、「飲んだことがない」とする回答がもっとも多かったのはロンボックで、女性は100.0%、男性は96.8%が「飲んだことがない」と回答している。ジョンバンとマドウラの男性は、ジョクジャカルタとマカッサルの男性にくらべ、アルコールを飲んだことがあるとする回答

【グラフ21】 アルコールを飲んだことがあるか





現代インドネシアにおけるイスラム教徒のイスラム教義理解と実践に関する意識調査（その1）（大形里美）

は15%以上少ない。これらの結果から、近代派イスラムが主流派の地域で、必ずしもアルコールに関してピューリタンの姿勢がみられるわけではないということが確認できる（【グラフ21】を参照）。

しかしながら、アルコールを飲む頻度は一般的にかなり低い。アルコールを飲んだことがあると回答した者に、どの程度の頻度で飲んでいるのかを質問した結果は【表2】の通りである。「催しがあったとき」、もしくは「かつて一度だけ」とする回答がほとんどで、習慣的に飲酒する習慣はごく一部の男性だけであった。

【表2】アルコールを飲む頻度と調査地域と性別のクロス表（数字は度数）

性別			調査地域						合計
			ジャカルタ	ロンボク	ジョクジャカルタ	ジョンバン	マドゥラ	マカッサル	
男性	アルコールを飲む頻度	毎日	1	0	2	2	1	0	6
		週に2-3回	1	1	4	0	0	2	8
		週に一回	1	0	2	0	1	5	9
		催しがあったとき （パーティー、友人との集まり）	26	0	13	8	12	17	76
		かつて一回だけ	19	0	14	14	9	15	71
	合計		48	1	35	24	23	39	170
女性	アルコールを飲む頻度	催しがあったとき （パーティー、友人との集まり）	6			1	1	1	9
		かつて一回だけ	6			2	3	5	16
	合計		12			3	4	6	25

## ②喫煙についての見解

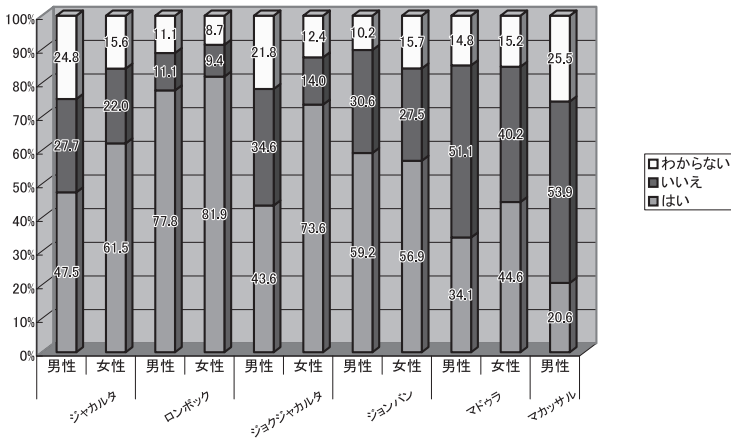
喫煙はイスラム法で明確に禁じられているわけではないが、体に良くないものは摂取しないほうが良いとする考え方から、ピューリタンの考えをもつものは喫煙を避けている。サウジアラビアやマレーシアでは、クルアーン、雌牛

章 (Al-Baqarah) 195節<sup>46)</sup>、および高壁章 (Al-Aruf) 157節<sup>47)</sup>を根拠として、喫煙をハラームとするファトワーが出されており、インドネシアにおいても同様のファトワーを出すことがインドネシア・ウラマー協議会 (Majlis Ulama Indonesia=MUI) によって検討されてきた<sup>48)</sup>。そして2009年1月に西スマトラでインドネシア全土から700名のウラマーを集めて開催されたインドネシア・ウラマー協議会 (MUI) の全国会議において、「子ども、妊婦による喫煙、公共の場における喫煙、そしてMUIの幹部の喫煙はハラームとする」という内容のファトワーが出された。

しかしながら、以前から喫煙は法的にはマクル (makruh: できれば避けるほうがよいとされる行為) とされているもので、ハラームではないとする立場をとっているNUの幹部は、このファトワーを無視する態度をとっている。このファトワーが出される以前から、ジャカルタ首都特別州では、2005年に公共の場所での喫煙を禁止する条例 (2005年第2号、及び第75号条例) が定められているが、思うように機能していないという実情があり、同ファトワーは、この条例を神学的な側面からサポートしようとしたものに過ぎないとする見方もある<sup>49)</sup>。

「ムスリムはタバコを吸わないほうがいいと思うか」という質問に対して、「はい」とする回答はロンボックでは男女ともに圧倒的多数を占めるが、その他の地域については、「いいえ」とする回答も多く、近代派イスラムの影響力が強い地域であるジョクジャカルタとマカッサルで「はい」とする回答が多いという結果も得られなかった。マカッサルの男性は53.9%が「いいえ」と回答しており、6つの調査地域の中で「いいえ」と回答した割合が最も高い。ジョクジャカルタの男性も43.6%が「いいえ」と回答しており、ジョンバンの男性の「いいえ」とする回答率の30.6%をはるかに上回っている (【グラフ22】を参照)。

【グラフ22】 ムスリムはタバコを吸わないほうがいいと思うか



### Ⅲ 調査結果についての全体的考察

#### 1. 地域差、近代派イスラムと伝統派イスラムの違い、性差

今回のアンケート調査を通じて、以下の点が明らかになった。

(1)まず第一点は、民衆のイスラム教義理解について、かなりの地域差が見られることだ。具体的には、都市部のモデルとした首都ジャカルタと、農村部のモデルとしたロンボックの間で、イスラム法に関する意識の差が歴然としていた。農村部のモデルとして選んだロンボックでの調査結果を見ると、あらゆる項目において、ジャカルタにおける調査結果に比べて厳格なイスラム教義理解をしていることがわかる。しかしながら、今回の調査で農村部のモデルとしたロンボックは、インドネシアの中でも「狂信的 (fanatik)」であることで知られている地域でもあり、農村という要素だけではなく、地域的な特色による影響が大きい点も考慮しなければならず、都市化の度合いとイスラム教義理解のあり方に相関関係がみられるとはもちろん言い切れない。

しかしながら、インドネシアの農村一般における民衆のイスラム教義理解のあり方を論じることができる農村のモデルなど、そもそも存在しないため、ロ

ンボックにおける今回の調査結果は、あくまでも大都会の対極に位置する農村の一例として位置づけられるべき性格のものである。

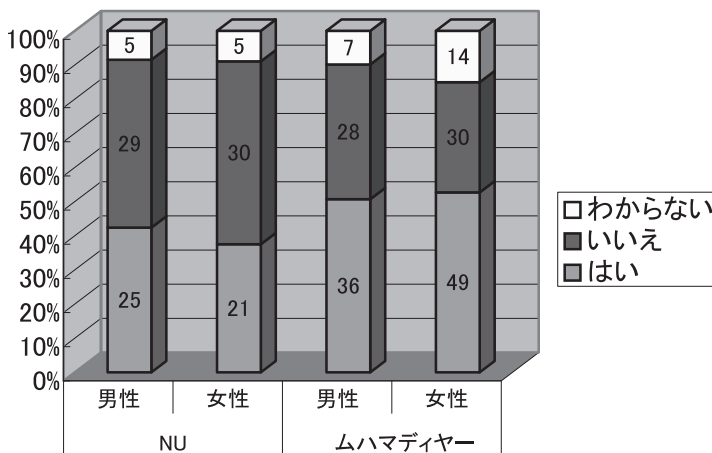
(2)第二点は、近代派イスラム、伝統派イスラムを代表する典型的モデルとして選んだそれぞれ二つの調査地についてみた場合、近代派を代表する二つの地域の間の類似性、あるいは伝統派を代表する2つの地域の間の類似性よりも、それぞれの組織の穏健派同士の類似性、そしてそれぞれの組織の強硬派同士の類似性の方が顕著に現れていた点である。

これらの穏健派と強硬派の違いは何を背景としているのだろうか。両組織の穏健派とされるジョクジャカルタとジョンバンの調査地域は、強硬派とされるマドゥラ、マカッサルの調査地域に比べ、より都会的で、コスモポリタンのであるという地域的な特徴や、教育水準がより高いという点では共通している。そこで、都市化の程度や教育水準の違いを両者の違いの一要因として考えることも可能であろう。しかしながら、切手刑や石打刑といったイスラム刑法について、首都ジャカルタの方が、ジョクジャカルタやジョンバンよりも賛成意見が明らかに多いという結果が出ていることはどのように理解すればよいのだろうか。ジョクジャカルタやジョンバンよりも都市化がはるかに進んでいて、教育水準も同程度あるいはそれ以上に高いジャカルタ<sup>80</sup>における結果が、必ずしもジョクジャカルタやジョンバンほど穏健でないということを考慮した場合、必ずしも都市化という観点からすべてが説明できるわけではない。何がこうした傾向の違いを生み出しているのか、その背景については、今後別の角度からの考察が必要である。

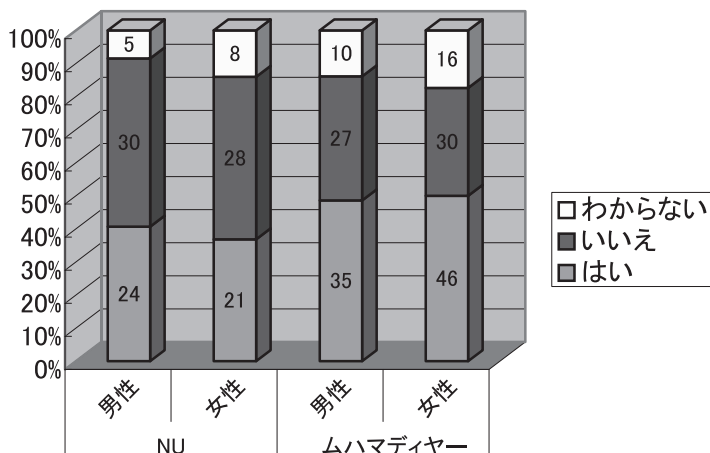
上述の通り、今回の調査によっては、近代派イスラムが支配的な地域と伝統派イスラムが支配的な地域の間、明らかな違いは見出されなかったものの、ムハマディヤーとNUの組織関係者のみを抽出して集計し集計したところ、そこには明らかな差異が認められた。窃盗罪に対する切手刑や姦通罪に対する石打刑などのイスラム刑法については、ムハマディヤー関係者、とりわけ女性に

賛成する者が多いことがわかる（【グラフ23】、【グラフ24】を参照）。地域的な差異が全体的な結果に影響していることも否めないが、6つの地域それぞれの組織関係者について集計するにはデータの絶対数が少ないため、両組織の関係者のデータを地域ごとに集計する手法は、残念ながら今回の調査結果の分析ではとることができなかった。

【グラフ23】 泥棒が手を切られることに賛成か（棒グラフ上の数字は度数）



【グラフ24】 姦通した女性が石打にされることに賛成か（棒グラフ上の数字は度数）



(3)第三点は、性別による差異についてである。イスラム刑法については、性別による差異はそれほど大きくなかった。もっとも大きかった差異も、マカッサルでは女性の方が切手刑への支持が約12%高かったこと、そして、石打刑について、ジョクジャカルタでは男性の方が、7.5%支持率が高かったことくらいである。全体的にみると、これらの刑法に対する支持率は、地域によって、男性がより高い場合、女性がより高い場合などまちまちであった。今回の質問項目に関しては、ほとんどの質問項目に関して、性差よりも、地域差の方が大きいという結果となった。

政府によるスカーフ着用の義務付けについては、ジャカルタを除く5つの調査地で賛成意見が過半数を占めた。スカーフの着用については、回答者(女性)自身が普段スカーフを着用する割合よりも、スカーフの着用を義務であると考えた割合の方が高い傾向が見られた。そうした意識を反映してか、ジョクジャカルタとロンボックでわずかに女性よりも男性の支持率が高かったのを例外として、その他の地域では、女性の支持率の方が高かった。特にNUの支持基盤であるジョンバンで11%、マドゥラで約6%の男女差があった。ジャカルタは6地域のうち、政府のスカーフ着用の義務付けに対する支持率ももっとも低かったが、女性の支持率は男性よりも8%高い値を示している。一方、近代派イスラムの支持基盤であるジョクジャカルタとマカッサルに関しては、男女ともほぼ同じくらいの支持率であった。

## 2. イスラム法の法制化へ向けた動きは、どの程度民意を反映したものか

上述の1.(1)で指摘したように、イスラム教義理解とその実践については、地域によってかなりの差異が存在することが明らかになった。そうした結果を踏まえれば、当然のことながら、現在インドネシア各地で進められているイスラム法の法制化へ向けた動きが、どの程度民衆の意識を反映したものであるかという設問に、今回恣意的に選択した6つの地域で実施した調査結果だけをもとに答えることはできない。しかし逆に、今回の調査で明らかになった地域差を

踏まえることで、どのような地域の民意を反映したものであるのかをごく大雑把に指摘することは可能である。

(1)切手刑、石打刑といったイスラム刑法に関しては、近代派イスラム組織ムハマディヤーの穏健派が支配的な地域と伝統派イスラム組織NUの穏健派が支配的な地域では反対派が圧倒的に多いが、それぞれの組織の強硬派が支配的な地域では、賛成派も多く、近代派イスラム組織の支配的なマカッサルでは賛成派が過半数を占めた。また農村のモデルとしたロンボックでも、賛成派が大半を占めた。これらの結果から、都市化の度合いが教義理解の厳格さと比例しているという見方が成り立ちそうであるが、都市のモデルとしたジャカルタでの調査結果を考慮すると、必ずしもそうした見方は成り立たないことも明らかになった。ジャカルタのイスラム教徒たちは、ジョクジャカルタやジョンバンのイスラム教徒と比較して、より厳格な教義理解をしており、どちらかといえばマドゥラでの調査結果に近い特徴を示している。しかしながら、6つの調査地をみると、切手刑、石打刑に賛成するものは、ロンボックとマカッサル以外では少数派で、今後、イスラム刑法がインドネシア国内各地で実施される可能性はかなり低いと考えられる。

(2)スカーフの着用義務については、常にスカーフを着用している、もしくは外出するときには必ずスカーフを着用とする回答が33.9%であったジャカルタにおいても、男性の53.0%、女性の52.3%が「義務である」と回答している。「義務である」とする回答率が過半数に満たないのは、ジョクジャカルタの男性で46.8%、ついでジョンバンの女性の47.1%、ジョンバンの男性の49.0%のみで、その他はいずれもスカーフの着用を「義務である」とする回答が過半数を上回った。この結果からすれば、公立学校の女子生徒へのスカーフ着用の義務化や、女性公務員へのスカーフの義務付けを制定する条例は、かなり民意に沿ったものであるといえるだろう。

(3)礼拝を警察が監視することに賛成かという質問に対しては、「いいえ」とす

る回答が調査を実施した6つの地域すべてにおいて圧倒的多数を占めた。断食を警察が監視することに賛成かという質問に対しては、「はい」とする回答がロンボックでは約7割ほどあったのを例外として、その他の地域では「いいえ」とする回答が圧倒的多数を占めた。これらの結果をみると、今後インドネシアで礼拝や断食を警察が監視するような条例が設けられることはまずないと予測される。

(4)アルコールの販売の禁止については、アルコールを飲酒する習慣をもたないものがほとんどであるため、今後インドネシアの国内各地でアルコールの販売を禁止する条例が制定される可能性はかなりあると予測される。

(5)喫煙については、ムスリムはタバコを吸わないほうが良いと思うものの割合が総じて高く、公共の場における喫煙を禁じる条例が制定されたジャカルタについても、女性の61.5%、男性の47.5%がムスリムはタバコは吸わないほうが良いと思うと回答している。よって、禁煙の条例は民意に沿った条例であると見る事が可能であろう。

## おわりに

以上、近年のインドネシアにおけるイスラム法の法制化へ向けた動向を受け、同国の草の根のイスラム教徒たちが、イスラム法、あるいはイスラム法の法制化についてどのような意識を持っているのか、現地で実施した意識調査の結果を基に、分析を試みた。

冒頭で触れたように、これまで、同国のイスラム教徒たちがどのような意識を持っているのかに関しては、既存の研究もあるが、都市と農村、近代派イスラムと伝統派イスラムの違いなどに注目したものではない。イスラム教徒の意識のあり方は、出身地方のイスラム伝統、年齢、性別、教育的背景などによっても大きく異なる。今回の調査では、都市化の程度、近代派イスラムと伝統派イスラムの違いといった要因が、どの程度民衆のイスラム教義理解、あるいはイスラム法の法制化に対する意識に影響しているのかを検証できるよう、調査



地域を選定した。同調査では、イスラム教徒の意識に関して、全国的な平均値を見るだけでは見えてこない、都市と農村の差異、近代派イスラムと伝統派イスラムの差異と共通点などが明らかとなった。

本稿ではイスラム法の法制化に関わる項目のみを抽出して検証したが、次号以降、ジェンダー規範、夫婦関係、一夫多妻婚、イスラム相続法、異教徒との関わり、男女間の関わりなどに関する意識が、都市化の程度や性別、伝統派イスラムと近代派イスラムの違いなどによってどのように異なるのか、引き続き報告していきたい。

こうした実証研究が、これまで漠然とした言説からしか憶測できなかった、あるいは憶測されることさえもなかったイスラム社会の内面を可視化し、異なる文化背景をもつ他者であるわれわれが、イスラム社会の現実をより個別具体的に理解するための一助となることを期待したい。

今回この意識調査を実施するにあたっては、調査準備の段階から、質問表の内容、調査方法などについて、同僚の社会学者である樋口里華氏から数々の貴重なアドバイスを頂いた。また調査地域の選定にあたっては、国立イスラム大学のアズマルディ・アズラ教授から貴重な情報とアドバイスを頂いた。両者に、この場を借りて、感謝の言葉を述べさせて頂きたい。また、現地調査の実施にあたっては、旧知の知り合いを含め数多くの方々から協力を頂き、調査を無事終えることができた。改めてここに感謝申し上げる次第である。

（本稿は、科学研究費補助金による研究成果の一部である。研究テーマ：「インドネシアにおける民主化とジェンダーの主流化－イスラムとの関係性」）

<注>

- (1) 1974年婚姻法、「イスラム法集成」については、拙論「インドネシアにおけるイスラーム家族法とジェンダー」『九州国際大学国際商学論集』第14巻第2号（2003）にまとめたので、参照されたい。
- (2) 同国のジェンダー主流化については、拙論「インドネシアの女性運動とジェンダーの主流化」（『東南アジアのNGOとジェンダー』明石書店、2005年）にまとめたので、参照され

たい。

- (3) 売春を取り締まること自体は、ジェンダー主流化に反するという性格はもたないものの、地方によっては、ホテルの前を3回往復すれば売春婦であると疑ってもよいような内容の条例もあり、買春する側、売春させる側に対する規制をしないまま、売春する側のみを厳しく取り締まる条例について、女性活動家たちは反対の立場をとっている。
- (4) こうした見方に立ち、イスラム法の法制化に反対する活動を行っているNGOに、KPI (Koalisi Perempuan Indonesia) やRahimaなどがある。
- (5) インドネシアにおいて「近代派イスラム」は「改革派イスラム」とも呼ばれ、都市部を支持基盤とし、ムハマディヤー (1912～) がその代表的な組織とされる。また「伝統派イスラム」は「保守派イスラム」とも呼ばれ、農村部を支持基盤とし、NU (エヌウ；1926～) がその代表的な組織とされる。しかしこの「近代派」＝「改革派」、そして「伝統派」＝「保守派」という区分は、20世紀初頭に、使用され始めた用語であり、その後のさまざまな変化を経て、すでに両組織の実態を示すには、時に不適切な用語となり始めている。

ムハマディヤーについては、西洋的な教育制度や、近代的な服装 (背広やボーイスカウトの服装など) や西洋の楽器など、当時「異教徒」のものとして避けられていた文化を積極的に取り入れていったことが、「近代派」、「改革派」と呼ばれた所以であった。しかし、当時「伝統派」、「保守派」と呼ばれていたNUも、決して近代化に否定的であったわけではない。組織規模の大きさから、組織の近代化は漸進的なものではあったが、西洋的な文化や制度を取り入れ、現在では「近代派」と同様の教育施設や病院を有するに至り、経済分野においてもさまざまな事業も展開している。そうした意味で現在においては、近代派イスラムのみが「近代的」であるわけではない。

伝統派イスラムと近代派イスラムの違いは、支持基盤の違いなどはもちろんあるが、イデオロギー的な違いがより重要な意味をもつ。伝統派イスラムが、「伝統派」と呼ばれる所以は、四大学派のイスラム学の「伝統」を重んじ、聖者崇拜や死者に対して行われるさまざまな儀礼などの慣行に寛容であり、現在のインドネシアのイスラム社会におけるさまざまな慣行を保持しようとする姿勢をもっているという意味で「保守派」と理解すべきである。そして信仰に関して「クルアーンとハディースに返れ」をスローガンとし、イスラムの聖典に対してより字義的な解釈を行うムハマディヤーなど近代派イスラムは、19世紀末から20世紀初頭にかけてエジプトのムハンマド・アブドゥラの思想家が提唱した近代サラフィー思想の影響を受けたもので、聖者崇拜などの慣行をイスラムの正しい教義からの逸脱だとして排除する特質をもつ。ムハマディヤーは、聖者崇拜などの行為を、クルアーンやハディースに書かれていない迷信に基づく逸脱であり、撲滅すべき悪弊だとして、「肺炎」を意味するTBC (TBC=Takhayul=迷信、Bid'ah=逸脱、Chrohat=聖者崇拜) と呼び、忌み嫌う。このようにより「純粋」なイスラムを目指して「改革」する姿勢をもっているという意味で、近代派イスラムは「改革派」とであるとみなすことは可能であるが、女性や異教徒に関する近年のリベラル派イスラムの議論に対しては、「保守的」な側面も持ち合わせており、「改革派」「保守派」が意味するところは、十

分複雑で、注意が必要である。

- (6) 2001, 2002, 2004年には、ジャカルタの国立イスラム大学 (UIN) のPPIM (Pusat Pengkajian Islam Masyarakat : イスラム & 社会研究センター) が、そして2005年にはフリーダム・インスティテュート (Freedom Institute)、2006年にはインドネシアの民間の調査機関であるLSI (Lembaga Survei Indonesia) が全国規模の調査を実施し、これらの結果を合わせて、2001年から2006年までの時系列的変化を示すデータが以下のサイトに掲載されている。<http://www.lsi.or.id/riset/81/sikap-publik-terhadap-penerapan-syariat-islam>

同調査では、インドネシア国内の33州から、それぞれの州の人口の比率に応じて1173人を無作為に選び、面接方式でデータを収集している。

- (7) NW (Nahdlatul Wathan) は、1935年、Tuan Guru Kiyai Haji Muhammad Zainuddin Abdul Majidによって、ロンボック島に設立されたイスラム組織で、初等教育機関から高等教育機関までのいくつかの教育施設を有し、布教活動を展開している。
- (8) 1924年、当時東ジャワ州スラバヤには、著名な若きキヤイKyai Abdul Wahab Chasbullahによって、人々の宗教実践や、教育や政治の分野における諸問題について話し合うために”Tashwirul Afkar (「思想の写真」)” という名のディスカッション・グループが設立されており、そのディスカッション・グループのメンバーたちは、活動を拡大するためにjam'iyah Nahdlatul Ulamaという名称の組織を設立しようとした。その際、当時最も大きな影響力をもっていたKyai Abdul Wahab Chasbullahの師、KH.Hasyim Asy'ariがなかなか同意しなかったために、組織の設立が困難な状態であった。しかし、そうした状況の中、マドゥラ島のKyai Cholilが組織の設立を促す内容のメッセージを送ったことでKH.Hasyim Asy'ariも新しい組織の創設に賛同し、NUが設立されたとされる。<http://bahrusshofa.blogspot.com/2007/02/kyai-kholil-penembuhan-nu.html> (2007年7月12日アクセス)
- (9) 1985年から2000年までムハマディヤーの南スラウェシ支部長を務めたJamaluddin Amin氏からマカassar地方でもっともムハマディヤー組織が発展している地域として、バジェン郡リンブン村を推薦された。2007年2月1日筆者によるJamaluddin Amin氏へインタビュー。
- (10) ジャカルタでの調査については、諸事情により、一部はスノーボール式による調査とならざるを得なかった。
- (11) Pasya, Musthafa Kamal, B.Ed., & MS.Chalil, Wahardjai, *Fikih Islam sesuai dengan putusan Majelis Tarjih*, Citra Karsa Mandiri, 2003, pp.356-358.
- (12) 幼少時代に、カーハル・ムザッカルによるイスラム国家樹立運動を経験したという宗教省の役人であるAhmad Yani氏 (スラウェシ州の州レベルのクルアーン教育担当官) は、かつての経験がトラウマになっていると語る。シンジャイ県 (Kabupaten Sinjai) で、当時5歳だった彼は、姦通者が首だけ出して土の中に埋められ、石を投げつけられていたのを実際に目撃したと証言する。当時、シンジャイ県では異性に触れただけでzina (姦通)

とみなされ逮捕され、窃盗や姦通を犯したものは、見せしめのために街を練り歩かされたという。Ahmad Yani氏は、イスラム法の制度化が真に人道主義に基づくものでなければならぬと語った。2007年2月28日筆者によるAhmad Yani氏へのインタビュー。

- (3) ナングロ・アチェ・ダルUSSアラム特別州ではアチェの特別の地位を定めた1999年第44号法と、アチェの特別自治に関する2001年第18号法に基づいて、「イスラム法違反者に対する鞭打ち刑の実施の指針についての2005年第10号州知事条令」が定められ、シャリーア警察によって公開の場で鞭打ち刑が開始された。Lampung Post紙, 2005年6月13日, "27 Warga Aceh Dihukum Cambuk." (<http://www.lampungpost.com/>), 及び Kompas紙, 2005年6月24日, "Hukuman Cambuk Pertama di Indonesia Dilaksanakan di Aceh." (<http://64.203.71.11/utama/news/0506/24/053905.htm>)
- (4) Pasya, Musthafa Kamal, B.Ed., & MS.Chalil, Wahardjai, op.cit., pp.358-365.
- (5) Pimpinan Pusat Muhammadiyah, *Himpunan Putusan Majelis Tarikh*, 1974 Muhammadiyah, pp.304-307. (ムハマディヤのタルジ協会の決定事項はインターネットにも掲載されている[http://www.geocities.com/tarikh\\_sidoarjo/masalah\\_bank.htm](http://www.geocities.com/tarikh_sidoarjo/masalah_bank.htm))
- (6) 雌牛章195節「またアッラーの道のために(あなたがたの授けられたものを)施しなさい。だが、自分の手で自らを破滅に陥れてはいけない。また善いことをしなさい。本当にアッラーは、善行を行う者を愛される。」
- (7) 高壁章157節「(省略)・・・また一切の善い(清い)ものを合法〔ハラール〕となし、悪い(汚れた)ものを禁忌〔ハラーム〕とする。・・・(省略)」
- (8) *Gatra*誌, 2008年8月21日号, "DaunTembakau Menunggu Fatwa," (<http://www.gatra.com/2008-08-29/>)
- (9) *Kompas*紙, 2009年1月26日, "NU Cueki Fatwa MUI." ([www.kompas.com/](http://www.kompas.com/))
- (20) 男性の高等教育の普及率についてみると、ジャカルタの男性が最も高い(高等教育を受けている比率がジョクジャカルタ、ジョンバンに比べてはるかに高い。)。しかし、高等学校レベルの普及率は、ジョンバン、ジャカルタもかなり高い。女性に関しては、高等学校レベルの教育についていえば、ジョンバンが最も教育の普及率が高く、続いてジャカルタとジョクジャカルタの女性がほぼ同程度となっている。高等教育を受けたことのある者の比率は、ジャカルタとジョクジャカルタが最も高く同程度である(【グラフ4】、【グラフ5】を参照)。

#### <参考文献>

〔日本語文献〕

- ―拙論「インドネシアにおけるイスラム家族法とジェンダー」『九州国際大学国際商学論集』第14巻第2号, 2003, pp.1-34.
- ―拙論「インドネシアの女性運動とジェンダーの主流化」『東南アジアのNGOとジェンダー』田村慶子、織田由紀子編著, 明石書店, 2005年, pp.187-236.
- ―宗教法人日本ムスリム協会『日亜対訳・注釈 聖クルアーン』(第6刷), 1996年.

〔外国語文献〕

- Pasya, Musthafa Kamal, B.Ed., & MS.Chalil, Wahardjai, *Fikih Islam sesuai dengan putusan Majelis Tarjih*, Citra Karsa Mandiri, 2003.

〔新聞・雑誌・インターネット〕

- <http://bahrusshofa.blogspot.com/2007/02/kyai-kholil-penembuhan-nu.html>  
(2007年7月12日アクセス)
- *Gatra*誌, 2008年8月21日 号, “DaunTembakau Menunggu Fatwa.” ([http:// www. gatra. com/ 2008-08-29/](http://www.gatra.com/2008-08-29/))
- *Kompas*紙, 2005年6月24日, “Hukuman Cambuk Pertama di Indonesia Dilaksanakan di Aceh.” (<http://64.203.71.11/utama/news/0506/24/053905.htm>)
- *Kompas*紙, 2009年1月26日, “NU Cueki Fatwa MUI.” ([www.kompas.com/](http://www.kompas.com/))
- *Lampung Post*紙, 2005年6月13日, “27 Warga Aceh Dihukum Cambuk.” ([http:// www. lampungpost.com/](http://www.lampungpost.com/))
- <http://www.lsi.or.id/riset/81/sikap-publik-terhadap-penerapan-syariat-islam>  
(ジャカルタの国立イスラム大学 (UIN) のPPIM (Pusat Pengkajian Islam Masyarakat : イスラム & 社会研究センター)、及びフリーダム・インスティテュート (Freedom Institute)、インドネシア調査機関 (LSI=Lembaga Survei Indonesia) による意識調査結果)
- Pimpinan Pusat Muhammadiyah, *Himpunan Putusan Majelis Tarib*, 1974 Muhammadiyah, pp.304-307. ([http://www. geocites. com /tarjih\\_ sidoarjo/ masalah\\_ bank.htm](http://www.geocities.com/tarjih_sidoarjo/masalah_bank.htm))